

# 国際協力を国際貢献の柱に



政策研究大学院大学教授  
**大野泉**

JICA、世界銀行、国際協力銀行（JBIC）と援助の第一線で活躍した後、中立的な立場から国際協力の政策に参画していきたいと大学教授の道を選んだ大野泉さん。2006年からは、政府開発援助（ODA）予算の削減をはじめとする近年の日本の国際協力に危機感を持つ有志らと、ODAが抱える課題を整理し、目指すべき方向性について議論。07年10月に、30の提言からなる「新しい日本のODAMニフェスト」を発表した。JICA・JBICでの勤務経験がある大野さんにとって、新JICA発足には特別な思いがある。「世界銀行で有償と無償の援助を一緒にできる面白さを感じていた。そこに日本の支援の良さが加わることで、今以上に素晴らしい仕事ができるはず」。学界を代表し、大野さんに新JICAへの期待を聞く。

（続きは裏ページへ）

政界、マスコミ、産業界、NGO、学界、官界、実施機関など、日本のODAに危機意識を持った有志によってまとめられた。提言内容など詳細はホームページ（[http://www.grips.ac.jp/forum/oda\\_salon/](http://www.grips.ac.jp/forum/oda_salon/)）参照。

## 「日本は独自の経験と理念で 世界に貢献できる」

政策研究大学院大学教授

### 大野 泉

Ohno Izumi

1958年兵庫県出身。外務省「国際協力に関する有識者会議」委員。81年に津田塾大学文学部国際関係学科卒業後、JICAの前身・国際協力事業団入団。87年に米国プリンストン大学で修士号取得後、88年から世界銀行、98年から海外経済協力基金(現国際協力銀行)に勤務。2002年より現職。著書は『世界銀行・開発援助戦略の変革』(NTT出版)、『日本の国際開発協力』(共著、日本評論社)など。



photos by Otsuka Masataka

第4回アフリカ開発会議(TICAD)とG8サミットの日本開催という千載一遇の年に、日本の政府開発援助(ODA)の2007年度実績が5位に転落したニュースが流れ、日本が国際協力を重視していないというマイナスイメージを世界に与えてしまったと思います。いくら緊縮財政でも、国家予算の1%にも満たないODAを毎年2~3%削ったところで、財政再建は難しい。国際協力が日本にとっていかに重要な意味を持つのか、国内でコンセンサスが取れていないことが、ほかの予算と同様に削減される原因だと思います。

日本は後発国ながら開発を成し遂げました。また欧米と違い、食料やエネルギーを海外に依存し、軍勢力もなく、国際協力のほかに国際社会に貢献できるツールをほとんど持っていません。かつては、戦後賠償や輸出振興などのためにもODAは重要で、アジア諸国を対象にすべきという“暗黙の了解”がありました。しかし、東アジアから“卒業”国が現れ、今や国際社会の関心はアフリカ開発に集まっています。自らの経験を生かし、途上国をはじめ世界の国々と相互関係を築いていくためにも、国際協力を日本の国際貢献の柱として据えるべきです。

援助潮流は振り子のようによく揺れ動き、かつては財政支援かプロジェクトか、貧困削減か経済成長かというような二者択一的な議論もありました。そうした中で日本は、愚直ともいえるほどぶれず、また現場を歩き現地の人々の考えに耳を傾けながら、信頼関係を築いてきました。世界銀行で勤務していたとき、そんな日本の良

さを実感すると同時に、すごくもったいないと思ったんですね。日本は誇れる経験があっても、それをうまく共有・発信できないがゆえに、国際社会の議論に反映されていかない。援助潮流をリードすることが目的ではありませんが、リードできれば途上国にとってより援助の選択肢が広がります。

新JICAに特に期待したいのは、開発援助のプロ集団として、各途上国のニーズを踏まえ、柔軟かつ包括的にさまざまな援助形態を組み合わせた協力ができるよう、個別・地域別の援助方針を担当する部門を強化すること。そして、支援内容の意思決定では、現地のJICA事務所の権限と機能を一層強化することです。同時に、現地で相手国の関係者や他ドナーと話し合い、日本側の議論を取りまとめる中核的な人材の育成にも力を注ぐべきだと思います。

また、新たに設置される研究所が日本の援助やアジアの開発経験を整理・体系化して発信するとともに、現場のグッドプラクティスを拾い上げ、それを他国にも共有して欲しい。日本と途上国、さらに国際社会を結びつけるインフラになればいいですね。

防衛大学校長のいおき べんご五百旗頭真さんが「明治時代以降の日本は近代化を遂げ、初めて西洋諸国と並び立つ非西洋の国となった。出自が何であれ世界史の主体となれることを身を持って示した。この先例は非西洋世界にとって大きな励みであり、その点で日本は世界のブランドである」と話しています。その通りですね。日本はほかのドナーにはない経験と理念を持って世界に貢献できる国なのです。